

シンポジウム：日臨技・都臨技共催企画～卒前・卒後教育のこれから～

1. 司会の言葉

山藤 賢*

初日の大会長挨拶でも述べさせていただいたが、今大会の大きなコンセプト、枠組みとして「鳥の目、虫の目、魚の目」という視点での構成を考えた。その中で、このシンポジウムは、まさに現場に直結する「虫の目」での講演であるとともに、ご登壇された先生方の顔ぶれを見ていただければわかるように、「鳥の目、魚の目」としても、大きな枠組みや歴史も含めた、繊細かつスケールの大きなシンポジウムとなった。

このシンポジウムの冒頭でも述べさせていただいたが、今大会を通してテーマの一つとして「ダイアログ(対話)」というものを掲げた。これは、叩く(カッション)という語源の意味合いの「ディスカッション」ではなく、「対話」である「ダイアログ」というものを大事にしたいという私の意向であった。大会中、各会場の座長の先生方からも、この「ダイアログ」という言葉が多く聞かれ、とても嬉しく思った。その上で、このシンポジウムは大会を象徴するような、講演とダイアログの時間となった。

各演者の講演内容の詳細は、この後の執筆の方を参照いただければと思うが、下田勝二先生(日本臨床衛生検査技師会常務理事・東京都臨床検査技師会会長*『東京から…卒前教育と卒後教育のこれから』)は、連携ということを常に話の中心に据え、卒前・卒後教育について、お話してくださ

った。そして、臨床検査技師という前に、まずは、「人として」、社会人として医療人としてどうあるべきかということの持論を、いつもながらの情熱で熱く語られたことが印象に残っている。萩原三千男先生(日本臨床衛生検査技師会執行理事*東京医科歯科大学附属病院検査部臨床検査技師長『現場と教育施設間のこれから(臨地実習を通して)』)は、臨地実習を中心に、臨床検査技師は、そしてその教育は、これからどうあるべきなのか、非常に多角的な視点からお話をしてくださった。医療が効率化の道を歩む中で、臨床検査技師の在り方、また臨地実習について、学生について、これもいつもながらではあるが、情熱的な先生のお話しには何度もうなずかされるとともに、先生ならではの率直な意見、本音をいただけたことが印象的であった。

今大会のシンポジウムにお二方の先生を選んだ理由がある。お二方の先生の共通点は、その「情熱」と「真摯さ」であると、私は、常々思っている。経営の神様と言われたドラッカーは、マネジャーとしての資質として唯一、最大のものは、その「真摯さ」であると述べていた。私はこのお二人の先生方を見ていて、まさしくそう思われる。それが、このお二人の先生を最終日のシンポジウムに選ばせていただいた理由である。

また、講演の後は、本協議会の三村邦裕前理事

*昭和医療技術専門学校 sando@kj9.so-net.ne.jp

長、戸塚 実理事長、また司会の私も交え、壇上での活発な意見交換とともに、フロアからの質問も含め、非常に濃厚で前向きな議論、ダイアログの場となった。

卒前・卒後教育、臨地実習、新しく取り入れられる検体採取の話などのテーマを中心に、議論は尽きることはなく、あっという間にシンポジウムは終了の時間を過ぎてしまった。会場の参加された先生方は、肌感覚として、この時間を共有できた素晴らしさを感じたのではないかと思う。臨地実習一つとっても、その期間や内容、様々な問題を我々教育機関側は抱えている。卒前・卒後教育という話の中の「連携」と「協働」は、このシンポジウムの中でもキーワードとなった。今まさに、各団体、様々な人々が、臨床検査技師教育に関して、卒前・卒後を通して、意見を交わし、「合意を持って」前に進んでいくことが必要であるとの結論もあった。

最終的に、このシンポジウムは、本当に勉強になったと共に、「我々がやらなければ」という意識をあらためて強く持たされたような、そんなスイッチを入れられたシンポジウムであったと感じている。

最後に

私は大会長として、大会最終日を飾るシンポジウムとして、誰に何をお願いしようかと考えたとき、この先生方にお話しいただきたいと心から湧き上がった先生方4人に、今回ご登壇をお願いした。下田先生、萩原先生、三村先生、戸塚先生、4人の先生方は、私の期待以上のものを、会場に与え、そして皆と共有し、大会に多くのものを残してくださった。大会終了後も、参加いただいた教員の先生方や、日臨技会員の立場で参加してくださった、技師長を始めとした現場の方々からも、あのシンポジウムが聞けてよかったと称賛の声をたくさんいただいた。私は、司会を務めさせていただいたことで、共にこのシンポジウムを創れたことに大きな喜びを感じ、そして大会長として、このシンポジウムを企画できたことを心より誇りに思っている。このシンポジウムは間違いなく、これまでの、そしてこれからの本大会の歴史に名を刻む、記憶に残るシンポジウムとなった。

ご登壇いただいた先生方、また、最終日まで学会に参加し、このシンポジウムにご参加いただき、大いに大会を盛り上げていただいた先生方にも深く感謝したい。

どうもありがとうございました。

注) ★役職等に関しては、講演依頼時のものである。